

それによる論争・対立を協力的な營みとして取扱うことが出来るという信仰である。この民主的方法を確立するための基本的なものは教育である。従つて民主主義的信仰は教育への信仰と言いかえてもよいだろう。それは、經驗の成長が何等外的な統制の形式に従うのでなく、各人の經驗の過程の中に「權威」が存在するという確信に立つことである。デュニーにおいては、民主主義的信仰が科學と宗教に基礎づけられた現代的生活の在り方であり、それが教育の依つて立つ根本的基盤である。

### 華嚴という語について

本學文學  
部講師 櫻 部 建

漢譯では六十卷又は八十卷に譯出されている大方廣佛華嚴經の標題の中にある「華嚴」という語は原語では何と、いかなることを意味するか、について多少の究明を試みたい。

具さに「大方廣佛華嚴經」という中、「大方廣」は、他のいくつかの大乗經典にも共通に冠せられる詞であるから、この經のまさしくの別名というべきは「佛華嚴」であるが、それは、この經のチベット譯や至元錄に見られる題名では、Buddhāvataṃsaka となつてゐる。ところが、探玄記には華嚴の語を「健攀驪訶修多羅」としてあり、並びに、四十華嚴に相當する現存梵本の標題が Gaṇḍavyūha となつており、その跋文に、Gaṇḍavyūha が廣義には大華嚴經全體を指す總名であり狹義には四

十華嚴に相當する部分のみを指す別名であると解せられるような句が見出されることから、「華嚴」の原語が Gaṇḍavyūha と考えられようとする。しかし、チベット譯大華嚴經の中で、右の梵文跋文に相當する箇處を見ると、そこでは(廣義の) Gaṇḍavyūha がまた Buddhāvataṃsaka とも呼ばれているように見えるし、また、漢譯大華嚴經の中に二箇處に見える「佛華嚴三昧」の語の中、一つは明らかに buddhāvataṃsakasamādhi であり、他は多分 buddhapiṇḍasamādhi であつてそうならばそれは versification のために用いられた buddhāvataṃsakasamādhi の代替語である、ということがチベット譯大華嚴經によつて推測できるから、「佛華嚴」の原語はまづ、buddhāvataṃsaka であり、その名をもつ經典がまた Gaṇḍavyūha の名でも呼ばれた、と考えるのが至當であらう。「佛華嚴」を buddhāvataṃsaka となすのは澄觀にのみ見られるところであるが従い難く思われる。

Gaṇḍavyūha の語義については今立入る餘裕をもたない。では buddhāvataṃsaka は何を意味するか。avataṃsa の語は普通頭につける華飾りを意味する。avataṃsaka が「華嚴」と譯されるのはそこから來たのであらう。チベット譯はこの語を「軍勢、人の集團」を意味する phal po che の語で譯する。したがつて buddhāvataṃsaka は「佛のあつまり、である。もしそうとすれば、それはいかなる佛のあつまりであらうか。

この buddhāvataṃsaka とつう成語は Divyāvātana, Avataṃsaka 等の中で用いられてゐるが、そのすべてが、釋尊の舍衛城において示した奇蹟を傳える説話の中である。この

奇蹟はパーリ傳では *yanakapāṭihāriya* と呼ばれているが、*Diyyav* などでは單に *mahāpāṭihāriya* と呼ばれ、その奇蹟の内容もパーリ傳と異つてゐる。この後者の型の傳承の中で、釋尊によつて奇蹟的に化作されたと傳えられるのが *buddhava-taṅsaka* すなわち「佛華嚴」であつて、雜阿含卷23、*Diyyav*, chap. 27, Av. の第15話、佛本行經卷4、*Mahāvastu* p. 266 F., などとその記述が見られるが、有部毘奈耶雜事卷26 (*Diyyav*, Chap. 12) に見られるものが最も詳しい。そこに述べられる *buddhavaṅsaka* の光景は、「(ナンダ・ウバナダの二龍王が) 即便持花大如車輪、數滿千葉以寶爲莖金剛爲鬚、從地踊出。世尊見已、即於花上安隱而坐。於左右及以背後、各有無量妙寶蓮華形狀同此、自然踊出。於彼花上一一皆有化佛安坐。各於彼佛蓮花〔左〕右邊及以背後、各有無量妙寶蓮華形狀同此、自然踊出。於彼花上一一皆有化佛安坐。重重展轉上出乃至色究竟天蓮花相次」といふものである。このような壯麗な光景が *buddhavaṅsaka* と呼ばれるのであるから、それは「佛華嚴」ともいえるし「佛の聚まり」ともいえるのであろう。したがつて、佛の聚まりといつても、それは單に多くの佛が一處に集まつたということではなく、右に述べるように、一佛を中心としてその左右背後に同じ佛が重重無盡に重疊した態をいふのである。

「佛華嚴」の語がアヅダーナ文學の中でそのような意味に使われているとすれば、「佛華嚴」の名をもつ大乘經典の中に説かれてゐる蓮華藏世界のアイディアが、その *Mahāpāṭihāriya* を傳える説話に胚胎すると推測することは可能である。その

*pāṭihāriya* の説話は、(北傳諸本においてのみでなくパーリ傳においても) 常に、釋尊が三十三天に昇つて生母及び諸天のために法を説き三道の寶階によつて僧迦奢の地に降下したという説話と結びつけられているが、それも亦、大華嚴の會座が地上にはじまり次いで天上に上りやがて地上に降つて了ること、そのアイディアに於て一致する。旁々もつて、これらアヅダーナ説話と、大華嚴經の文學的構成との間に存する關連を考えしめるものがあるのである。

### 曇鸞傳の一節

本學文學部教授  
授文學博士 野上俊靜

曇鸞大師の生涯に於いて特筆大書すべきものは、四論の學匠としての師が、菩提流支の教えによつて、一轉、淨土願生者となつたことである。ところで、この時に流支から授けられた經典が、いわゆる三經一論の中のどれであつたか、ということとは、古來、大きな疑問とされている。鸞師に關する最古の史料であるところの唐の道宣の「續高僧傳」では、それは「觀無量壽經」であつたとしている。道宣はいかなる根據から觀經説を樹てたのであろうか。當時の佛教界を見るに、智顛・靈裕・慧遠・吉藏等々、いわゆる聖道の諸師にして本經の講説に努めた人は多く、しかも、道宣存命中に并州・長安を中心に燎原の火の如く弘まつた道綽・善導らの淨土教は、まさしく「觀經」に基づく淨土教に他ならない。まことに、「觀經」は當時の佛教